みぃちゃんとギャバ猫のアメリカ生活記

帆摘

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
みぃちゃんとギャバ猫のアメリカ生活記

【Ｎコード】
Ｎ６０８７Ｈ

【作者名】
帆摘

【あらすじ】
堀内美香流、小学６年生。父親のアメリカ転勤に伴い家族で移住する矢先に母親が交通事故死を遂げ、３年前に学校の帰りに拾ってきた猫は１週間前より行方不明。悲しみを抱えた美香流の前に現れた母親の魂を取り込み化け猫もとい猫又となって帰って来た愛猫とのほのぼのアメリカ生活日記。

1話：ギャバ猫との出会い

「ねえ、いいでしょ？ママ！私、この子飼いたいの！お願い！」必死の私のお願いにお母さんはう～んと首をかしげて言った。
「そうねえ、じゃあパパにお願いして良いって言ったら飼っても良いわよ。」（まあどうせ良いっていうに決まってるけど・・・）母親の涼子は娘が拾って来たふてぶてしい顔つきの猫を見ながらそう思う。夫の裕幸は大の猫好きだ。娘にも激甘な彼が娘の必死の願いを断るとは考えずらい。だが、一応夫に聞いて判断を任せるのが一番だ。

「わかった！じゃあ、パパが良いっていったら絶対よ？」娘の美香流は学校の帰りに拾って来たという小汚い猫を抱きしめて喜んでいる。たぶんあの子も夫が駄目だと言わない事が分かっているのだろう。案の定その晩帰って来た夫は娘が拾ってきたさほど可愛いとも言えない猫をじいっと見ると嬉しそうに微笑んだ。

「その猫、うちで飼っても良いけどちゃんと美香流が面倒をみるんだよ？」
「うん、わかった！ありがとうパパ！よかったねえ、ギャバ猫！」
美香流は猫にしては大きめの身体を持つそれの身体をぶらぶらと揺らしながら微笑みかけた。
「美香流・・・なにそのギャバ猫って・・・？」私は唖然として聞き返す。
小学校2年生になったばかりの美香流はにっこりと笑って言った。
「だってママ、この子、猫なのにニャ～って鳴かないでギャバギャバいうんだもの。だからギャバ猫！可愛いでしょ？」
娘の命名のセンスにはちょっと頭痛を感じたが、どうにも本人が気

に入っている様子なので私は肩をすくめると何も言わなかった。美香流が小学校の帰りにお腹を空かせていたらしい汚い野良猫を拾って来て3年が過ぎた頃、突如その猫はうちから姿を消した。

何度も猫を探して町内を練り歩き、迷い猫の張り紙を出し、そして保健所などにも問い合わせたがギャバ猫を見つける事はできなかった。

お父さんが言った。「猫は自分の死期が近くなると、身を隠すと言うからね・・ギャバ猫みぃちゃんが拾って来た3年前から随分年を取っていたからそろそろ、その時期だったのかも知れないよ・・？」

私はなかなかギャバ猫の事が諦めきれなかった。もうすぐ・・桜の花が咲く頃には、私たち一家は揃ってアメリカに行く事になっていた。科学技術者でもある美香流の父、裕幸が3年間アメリカで仕事をする事が決まったからだ。

ギャバ猫がいなくなってから1週間が立った頃、新たな悲劇が私たちを襲った。お母さんが居眠り運転をしていた車に跳ねられて死んだのだ。信じられなかった。

お葬式の日、親戚や近所のおばさん達が手伝いに来て、私の事を話していた。

「美香流ちゃん、まだ小さいのに・・・浮かばれないでしょうねえ・・・」

「車を運転していた男性、すごく酔ってたらしいわよ?」

「裕幸さん、アメリカへの栄転だったと言うのに・・・どうするのかしら」

色々な噂や話を聞くのが嫌で私はこっそりと家を抜け出た。お父さんは喪主として悲しむ間もないほど忙しい。どうして私たちを静かにほっておいてくれないのか・・・

私は溢れる涙を拭いもせず、もくもくと歩いていた。気がつくと町

外れの空き地まで歩いてきていた。ここはよく、お母さんと一緒に散歩に来た二人のお気に入りの場所だった。春先には小さな野花がいっぱい咲いてとても綺麗なのだ。その時、涙でぼやけた視線の先に何か違和感のあるものを見つけた。私はぐいっと袖口で涙を拭うとじっとその物体を凝視する。

「ギャバ猫・・・・？」そう、私の目線の先には、1週間ちょっと前にいなくなった愛猫のギャバ猫の姿があった。見間違いではないだろうか。私はゆっくりと猫に近づいて行く。

目の前に忘れもしない不細工な顔をしたギャバ猫の姿があった。

「ギャバ猫！」私はそう叫んで、愛猫をゆっくりと抱き上げ胸の中に包み込む。

「お前・・・一体今まで何処に行ってたの？すごく、すごく心配したんだよ！それに、ママも・・・」そういって私は嗚咽を漏らして泣き出した。

胸の中からくぐもった声が聞こえた。

「痛い・・・いたいっちゅーねん、ちょっと離してんか！」え？涙が一瞬のうちに止まり、おそるおそる、胸の中に抱きしめていた猫を見る。まさか・・猫が話した訳じゃないよね、空耳・・？そんな事を考えていると、また目の前の猫が喋った・・・そう、喋ったのだ！

「あんなあ、うちに逢えて嬉しいのはわかるけど、あんまり力いれんとってーや。さすがのうちでもかなりきついっちゅーねん。」

「ギャバ・・猫？」私は唖然として愛猫の名を口にする。

「ああ、ほんまにそのセンスのないネーミング。最悪やな・・・今まで何度ゆうたろうかと思ってたかわからん。」猫は私の腕の中からとんと抜け出ると呆れた様子でふふんと鼻を鳴らした。

「な、、、なんで猫が喋ってるの？！」私は吃驚して悲鳴に近い声を上げた。

「こら！そんなうるさい声たてんな！誰かに聞かれてまうやろ？ま

あな、色々と事情があるねんって。おいおい説明したるさかいとりあえず、家帰ろうか？あんた、勝手に家でてきたんやろ？裕幸心配してんで？」

なんでギャバ猫がお父さんの名前を呼び捨てにしてるんだろう・・・なんてそぐわない事をぼんやりと考えながら、私はギャバ猫を抱き上げると家に向かって歩き始めた。

もう大分太陽が落ち、暗くなっている。確かにお父さん達も心配しているだろう、何も言わずに出て来てしまったのだから・・・腕の中にいるギャバ猫は先ほどまでとは違い大人しく美香流に抱かれたままだ。人目があるからかもしれないが、うんとも寸とも言わなかった。

さっきまでお母さんの事で頭が一杯で悲しくて悲しくて仕方がなかったのに、何故か今はギャバ猫の少し重みのある身体とそこから与えられる熱がじんわりと美香流の心をあったかくしていた。

2話：信じられない出来事

うちの付近までくると、近所のおばちゃんが大きな声を上げて近寄ってきた。

「まあぁ美香流ちゃん！よかったわ～。突然いなくなって皆で探していたのよ！一体何処へいってたの？」おばさんの声を聞きつけたのか、他の人も駆け寄ってきた。

一人が家の方に走って行く。お父さんに告げに行ったのだろうか・・・。私は近所の人達に囲まれたまま、一緒にゆっくりと家に戻った。扉が勢い良く開かれお父さんが青白い顔で飛び出して来た。一瞬顔を見た時に思った事は怒られる！と思ったのだが、お父さんは私の身体をぎゅっと抱きしめて小さく震える声で言った。

「良かった・・・美香流までいなくなってしまったら僕は・・・」

その言葉に私はすごく罪悪感を覚えた。そうだ、悲しんでいたのは私だけじゃない。お母さんが大好きだったお父さんもいっぱい苦しんでいたのに・・・それなのに・・

「ごめん・・なさい」そういって私も大声を上げて泣き出した。暫く泣いているとお父さんと私の真ん中で「ふぎゃ！」っという声が聞こえた。

「あ！」慌てて私は身体をはなして抱っこしていたギャバ猫を地面に下ろした。猫は私の方をじとっとした目で睨むと（そんな風に見えた）尻尾で軽くお父さんの身体を2回叩いて身体を刷り寄せた後、悠々と開かれた玄関からうちの中に入って行った。

「ギャバ猫・・・？」お父さんもびっくりしたように見ている。さっきまではお父さんも動転していて気がつかなかったのだろう。私もすっかりギャバ猫を抱いていた事を忘れていたのだから。私は涙を拭って言った。

「うん、お父さん、ギャバ猫生きてたんだよ！私たちの所に戻って来てくれたんだ！」
「そうか・・生きていたのか・・・」お父さんは小さく呟いた。
結局中断されていたお葬式が終わって、近所や親戚のおじさんおばさん達が帰ったのは夜の１０時を過ぎる頃だった。
皆を見送った後、お父さんは私の肩を抱いて、「美香流、疲れただろう」といって家の中に入った。すると二階からトントンと音を立てて、ギャバ猫が降りて来た。今まで忙しい間は一切顔を見せなかったのに皆が帰ったら姿を表すなんて・・本当に変わった猫・・変わった・・・？
「あ～！！！！」私は大きな声を上げた。
お父さんが吃驚して私の口を塞ぐ。危ない、危ない・・ご近所迷惑だ。私は少し声のトーンを落としてギャバ猫を指差して言った。

「お父さん！ギャバ猫が喋ったんだよ！！」
一瞬お父さんは何を言っているのか分からないと言った風情で私とギャバ猫を交互に見る。
ギャバ猫はふにゃ～んと声を出してお父さんの足下に来ると身体を撫で付けた。
「あっ！こいつ、お父さんの前では猫かぶってる！猫みたいな声出してる！」普通で聞くなら猫が猫かぶり・・・だなんてそんな馬鹿な話はない。だけど私はしっかりと覚えているのだ。
ギャバ猫が喋った事を。ギャバ猫はちらっと私の方を見るとそのままリビングの方へ向かっていった。私たちも猫についてリビングへと向かう。
ギャバ猫はいつもお母さんが座っていたお気に入りのソファーの上に飛び乗ると、私たちにも座れとでも言うように首を振った。私とお父さんは顔を見合わせ、一緒にソファーに座る。

と、ギャバ猫が口を開いた。まるで「不思議の国のアリス」にでてくるチャシャ猫のようだ。
「は～、つかれた。ようさん人が来てたなあ。うちの生前の人柄が忍ばれるってもんやわ。」
お父さんはいきなり喋りだしたギャバ猫を口をぽっか～んと開けて凝視している。
「ほら！言ったでしょ？パパ、ギャバ猫が喋るんだよ！」私はぐいぐいとお父さんの袖を引っ張る。お父さんは吃驚して固まったままだ。
「ああ、まったく裕幸さんはそういう所が昔から変わらないのよねぇ」と今度はギャバ猫の口調が変わる。さっきまで関西弁で喋ってたのに今度はお母さんみたいな喋り方だ。

「ほら、しっかりしなさい！」そういってギャバ猫は尻尾でお父さんの顔を叩いた。
「猫が・・・猫が喋った？！」お父さんが驚きの声を上げる。
「何を今更・・・。まあでも普通猫が喋ったら吃驚するわな・・。あんなあ、よう聞きや？うちは猫又になったんや。猫又っていうのはな、１００年の齢を生きた猫だけがなれる妖怪変化や。まあうちの場合本当は、１００歳にあともうちょっと足りへんで普通に死ぬとこやったんやけどな・・涼子が事故に合って死んでもうた時とうちが死ぬ時、二人の魂が混ざりおうて猫又として転生したんや。つまるところ、うちは猫又であり、あんたのお母さんなんやで？」

「え？ギャバ猫がお母さん？」
「そうや、ほら見てみ、ここの尻尾の所が二股に別れてるやろ？これが立派な猫又になった証や！」そういって尻尾をフリフリさせて見せる。
「まあ、うちは、涼子の魂と混ざり合って生まれた猫又やからちょっと普通の猫又とは違うみたいやけどな。ちゃんと涼子としての記

憶も残ってんねんで？」
にわかには信じられない事だったが、ギャバ猫を抱いていた時に感じたあの温かさは確かにお母さんのものだった。
「そんな・・・涼子が化け猫になったって事か？」お父さんは唖然としてギャバ猫を見つめる。
「失礼な言い方せんといてーな。猫又や！化け猫やあらへん！」そういってぼんっという音と共にギャバ猫はお母さんの姿に変化した。
「おかあ・・さん？」それは確かに生前別れたきりの母の姿だった。
耳と尻尾を除けば・・・。

3話：美人薄命

「涼子！」お父さんがやおら立ち上がってギャバ猫お母さんに抱きついた。いきなり立ち上がるもんだから、一緒に座っていたソファーが揺れて私はソファーの上で転ぶ。
もう、お父さんは！さっきまで口をぽか～んってあけてギャバ猫の事見てたのにお母さんの姿になった途端これだなんて・・。でもお父さんはお母さんが大好きだから猫の姿でも帰って来てくれて嬉しいんだろう。でもなんか変な気分だ。だって、まあ家の中に設置してあるお棺の中にはお母さんの死体が入っているはずなのに・・・。車にはね飛ばされて頭を強く打ったお母さんはあっけなく、救急車がくる前に死んでしまったのだと聞かされた。

「あ～あ～、もうほら！ええとしこいて泣かんどき！大の大人がみっともない。美香流に駄目なお父さんやと思われてしまうやろ！」と尻尾をフリフリさせながらギャバ猫お母さんが言った。
何故か変に私は冷静で、ギャバ猫お母さんに問いかけて見る。
「ねえ、耳と尻尾がでるよ・・？」ギャバ猫お母さんはふぎゃっと言って両手で耳を押さえる。お父さんはまだギャバ猫お母さんに抱きついたままで離れない。
「堪忍なあ。まだうまいこと変化でけへんねん。なんてったって猫又になったばっかしやしなあ。ちょっと練習が必要やな、これは・・」とぶつぶつ言っている。
私はもう一つ不思議に思っていた事を聞いた。
「ねえ、どうしてギャバ猫とお母さんの魂が混じっちゃったの？」
「それはなあ、よおわからんけど、うちももうすぐ猫又になれるはずやったのにって強い思いと涼子のあんたらを置いて死なれへんって思いが同時期に死んで重なったんやろか？まあええやん？何にしろ、こうやって戻ってこれたんやし。きっと神様がサービスしてく

れたんだよ。」

最後の一言はお母さんの言葉らしかった。「神様がサービスしてくれたのよ。」とは何か良い事があったときの母の口癖だった。普通なら動転してしまうようなこの変な状況に何故か私は納得していた。だが、ひとつだけ確認しとかなくてはならないことがある。

「ねえ、ギャバ猫お母さん・・・今度は、今度は勝手に私やお父さんを置いていなくならないでね？絶対だよ！」私はギャバ猫お母さんの手を握りしめて真剣に言った。

お父さんもちょっと落ち着いたのか、顔を上げてギャバ猫お母さんの顔を凝視している。

「そんな目でみんくてもおらんくなったりせんから・・二人とも安心しーや。」ギャバ猫お母さんは優しく私たちに微笑んだ。よかった。ギャバ猫のまま微笑まれたらきっと怖かっただろう。

一息ついた頃にはもう12時を回っていた。「お子様は寝る時間よ。」とギャバ猫お母さんが私をせっついて二階に上がらす。

「前見たいに、一緒に寝てくれる・・・？」ギャバ猫はいつも私のお布団の足下で丸くなって寝ていた。するとお父さんが横から口をだす。「ずるいぞ！俺も一緒に涼子と寝たい！」

呆れたようにギャバ猫お母さんがお父さんを見てため息を吐いた。

「裕幸・・子供じゃないんだから・・」でもお父さんはギャバ猫お母さんの手を握ったまま離さない。もしかしたら、お父さんも朝になってこれが夢だったなんて思うのが怖いのかもしれない。私のように・・・。

「じゃあさ！、家族3人川の字になって寝ようよ！そしたらいいでしょ？」

「まあ、、、仕方ないわね・・。」とギャバ猫お母さんはあっさりと承諾する。まだ猫又になったばかりでずっと人型だと肩が凝ると

おばあちゃんみたいな言い訳をして（実際１００年生きているらしいからおばあちゃんかもしれないが）ギャバ猫は元の猫に戻った。お父さんはちょっと残念そうだったけど、早々とこの事態に対応しているお父さんは流石とも言えなくはない。

お父さんは科学技術者なのに、こういった不思議に関しては昔から信じる人だったらしい。いつかお母さんが話してくれたことを思い出す。見た目真面目で融通がきかなそうに見えるけど、中身は純真でとても一途なお父さんに惹かれたの！と頬を染めて言っていたラブラブ夫婦だった。

今日はたくさんの事がありすぎて本当は私たちもすごく疲れていたのだ。布団を敷いてギャバ猫お母さんを真ん中に二人と１匹半はあっと言う間に眠りの中に落ちて行った。

次の日の朝、寝ぼけ眼でがばっと起き上がった私は隣を見て目が覚める。いない！ギャバ猫お母さん？！慌てて１階に降りて行くと良い匂いが漂って来た。目玉焼き・・？

台所にはギャバ猫お母さんが立って、生前のママのように朝ご飯を作っていた。私はほっとして力が抜ける。

「あら・・もう起きたの、美香流？お父さんを起こして来てちょうだい。」と尻尾をまたフリフリさせながらギャバ猫お母さんが言った。なんだか分からないけど嬉しくて涙がでてきた。

お母さんがいる・・・どんな形であろうと、お母さんが戻って来てくれたんだ。

突然泣き出した私を訝しげに見ていたギャバ猫お母さんは、私の近くまでくるとぎゅっと抱きしめてくれた。それだけで胸が一杯だ。

「うん！」私は勢いよく頷くと、まだ疲れて寝ているお父さんをおこしに二階へと上がった。

ギャバ猫はじっとそんな美香流をみて、そしてふとリビングに目を移す。そこにはもう抜け殻となった涼子の棺桶がおいてあった。す

っと音も立てずに棺桶の側まで来ると顔の所の扉をゆっくりと開く。
がっかりしたようなギャバ猫の声が部屋に響いた。
「ああ、やっぱり私って死んじゃったのね・・美人薄命ってホントだったんだわ・・・」

4話：お別れと旅立ち

3人で仲良く朝ご飯を食べた後、私たちはこれからの事について話し合った。
今日の午後、お母さんの身体は火葬されお墓に埋葬される手はずになっている。葬儀屋さんの車は11時にうちにくる事になっているそうだ。
ギャバ猫お母さんが言った。「今更だけど、、私本当に死んじゃってたのね。ちょっとショックだったわ。ギャバ猫と一緒の身体になるなんて・・ほんと変な感じなのよ。私は私だけど、ギャバ猫でもあって、ギャバ猫の生まれてから今までの記憶もある。これってちょっとした2重人格っぽいわよね・・ギャバ猫の意識が前に出ているときは関西弁になっちゃうし。私は猫の目を通して二人を見てるの。でも人型になったときは私の意識の方が強く出るみたい。といってもちょっと混じってるんやけどなあ・・」
確かに今のギャバ猫お母さんは関西弁といつものお母さんの喋り方が混じってなんだか面白い。

「これから・・・どうするの、お父さん？」私はお父さんに問いかけると、ギャバ猫お母さんが、きっぱりと言った。「あら、決まってるわよ。アメリカに行くんでしょう？」
ギャバ猫お母さんの言葉に私とお父さんは吃驚して顔を見合わせた。
「え、でも・・お母さん死んでしまってお父さん、アメリカ行きを辞めようとしてたんだよ？」
「どうして辞めちゃうの？行けばいいじゃない。うちもアメリカ見てみたいわ～。」そういってギャバ猫お母さんは手の甲をぺろっと一なめして耳の辺りをごしごしこする。
ああ、やっぱり人型になっても猫の習性は変わらないんだ・・。
「でも・・涼子さん、本当に良いのかい？」

「良いも何も、私楽しみにしてたのよ。私が死んだからって戻って来て辞めなくても良いと思うんだけど・・それに私の魂はこうして戻って来た訳だし、このまま日本にいても、ご近所のおばさん達は私が死んでしまったのを知っているから、まさかこの姿であう訳にも行かないしねえ・・」と、ギャバ猫お母さんは尻尾と耳をふるふるさせてお父さんに言い募る。

「分かった、じゃあ、もう一度研究所に問い合わせてみるよ。」なんだかんだ言ってお父さんはお母さんの言う事を優先させるのだ。

「美香流はいや？アメリカに行くの・・・」ギャバ猫お母さんが私に問いかける。

「ううん・・こうしてママとギャバ猫が一緒になって戻って来てくれたし・・でも、アメリカにいってもその姿のままじゃ、人前にはでられないと思うよ？」

「そうにゃのよ～。まだまだ練習が足りないわねえ。すぐ疲れちゃうし。ま、どっちにしろ私は裕幸さんと美香流と一緒にアメリカに行きたいわ。」

そうして私たち二人と1匹半のアメリカ行きが決まったのだった。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

ーーーーーーーーーーーー

その日の午後私はギャバ猫を抱いてお母さんの身体にさようならを告げる。お母さんの身体は塵に帰ってしまったけれど、本当のお母さんはここにいる。私はぎゅっとギャバ猫を抱きしめて、お父さんと一緒に岐路についた。

私たちがアメリカ行きを決めた事に近所や親戚のおじさん、おばさんは驚いていたけれど、お母さんが亡くなったこの家にいるのは辛くて、アメリカへはそれを忘れるために行くのだろうと勝手に納得してくれた。

あっという間にアメリカに行く1週間前になり学校でも私を励ます会と、お別れ会がクラスで開かれた。みんな気を使ってくれているのがわかるが、私があんまり悲しくはないんだよって言ったら吃驚するだろう。だってお母さんは私たちと一緒にアメリカに行くのだから！

仲の良かったクラスメート何人かと最後の土曜日にファミリーレストランでもう一度お別れ会をして、アメリカに行ってもメールのやり取りをする事を約束する。

優里ちゃんや、薫子ちゃん、みんなとお別れするのは寂しいけど、アメリカはすごく楽しみでもあった。仲が良い友達は、また日曜日に空港まで見送りに来てくれた。

「あれ？美香流ちゃん、飼い猫も一緒にアメリカにつれていくんだ？！」籠の中に入ったギャバ猫を見て一人が声を上げた。

「うん、そうだよ。だって、ギャバ猫は私たちの大切な家族なんだから！」私とお父さんは目を見合わせてにっこりと笑う。

最初、ギャバ猫は貨物扱いで飛行機に乗ることを嫌がってどうしても人型で乗って行くときかなかったのだが、まだ変化は耳と尻尾がとれないし、ママの姿にしか変化できないのだから、他の人がびっくりしてしまうと言いくるめ、アメリカに着いたら特大のステーキをご馳走するからと言ってやっと納得してもらった。今もギャバ猫は籠の中でふてくされている。

こうして私たちは長年住み慣れた日本の地を離れ、アメリカへと旅立った。

5話：ギャバ猫アメリカに行く

東京からロサンゼルス、そして乗り換えをして私たちはテネシー州のノックスビルという町へついた。ここから車で３０分ぐらいの所にあるオークリッジという町には大きな研究所があり、お父さんはそこで科学者として働く事になるらしい。
ノックスビルの空港で大きな荷物と一緒に運ばれて来たギャバ猫はとても機嫌が悪かった。急いで籠の中から抱き上げて機嫌を伺う。
「ギャバ猫、長い間お疲れさま。もうちょっとしたら夕ご飯でおいしいステーキ食べさせてあげるからね！」と私が言うとふんっと小さく鼻を鳴らした。本当にもう、大人気ないんだから！

お父さんは迎えに来てくれた研究所の人と話をしている。横を向いても、前を向いても日本人ではない外人さんが一杯で、話している言葉も全然分からない。私は小さく首をすくめるとお父さんの所まで走って行き、ぎゅっと抱きついた。
「ああ、美香流、ちょうど良かった。こちらがこれから僕の上司になる、高瀬治さんだよ。ほら、御挨拶して。」
顔を上げると人の良さそうなおじさんがニコニコしながら、こちらを見ていた。
「やあ、こんにちは、君が美香流ちゃん？はじめまして、僕の事はサムおじさんって呼んでね！どうぞよろしく。」と子供の私にも丁寧に手を差し伸べた。ギャバ猫がトンと私の腕の中から飛び降りて、行儀良く座ると私の方を見て目をしばたたかせた。挨拶しろと言っているに違いない。
私はおずおずと、そのサムおじさんとやらに挨拶をする。どこからどう見ても１００％日本人なのに、何故サムおじさんなんだろうと思ったが口には出さない。

お父さんは、私たちがアメリカにくる前に、何度か一人で、研究所やこれから住む町を訪れて、私たちの住む所や、学校を決めて来てくれている。きっと、涼子さんも、美香流も気に入ると思うよと、住む家を決めて帰って来た時にニコニコして言っていた。一体どんな家なのだろうか。
サムおじさんの大きなバンに私たちの荷物を詰め込み、空港を出た。見慣れない風景や、英語の看板をみて私の胸が高鳴った。これから、このアメリカで生活をするんだという事がもっとみじかに感じた。私とギャバ猫はずっと後ろで目に映る様々な異国の情景を楽しんでいた。

お父さんは、田舎の小さな町だよと言っていたが、確かに東京に住み慣れた私たちにとってその町は思っていた以上に田舎だった。広い道路の脇をのそのそと歩く牛の大群に驚き、また住宅街に入っては可愛い異国情緒溢れた家にため息を漏らす。
あっというまに私たちはこれから住む事になる家の前へとやって来た。パーキングに車を止めてドアを開けると、ギャバ猫が勢いよく飛び出して家の扉の前まで走って行き、開けろと扉をかりかりと引っ掻いた。

その家は水色でペイントされたとても可愛い家だった。とんがり屋根のトッペンには風見鶏がくるくると方向を変えて回っている。家の前には芝生があり、裏にも大きな庭があるという。
早く中に入りたくて仕方が無い私とギャバ猫はお父さんがくるのを待ちきれずに鍵を貰ってくると一足先に家の中に入った。
「ひろ〜い！それにすごく可愛い！」そこには私が夢に見ていた通りのアメリカのお家があった。「2階に3つ部屋あるらしいよ、行こう！ギャバ猫！」私は靴を玄関にほうり投げると一足先に階段を登って行ったギャバ猫の後をついて階段を駆け上がる。まだ家の中には家具らしい家具は揃ってなかったが、それでも部屋の中には最

低限のものが置いてあった。

「わあ！ギャバ猫、私どのお部屋にしようか迷っちゃうよ！」

『一番大きな部屋は夫婦の寝室やで、美香流は後の二部屋のどっちか選びや～？』ギャバ猫が大きな部屋のキングベッドの上でゆったりと毛繕いしながら言った。

「ええ？そうなの？そっか、うん、じゃあ私は向こう側の部屋だ！」お父さんがトランクを運んで二階へ上がって来た。

「美香流、気に入ったかい？必要最低限のものはここの家の大家さんが置いておいてくれたけど、これから少しずつ気に入ったものを買いそろえるといいよ。日本からの荷物が届くのは一週間後だからね。」

「お～いい！この荷物はここでいいのかあ？」と下からサムおじさんの大きな声が聞こえた。

「ああ、すみません！今行きます。」お父さんはあわてて階段を降りて行く。私は夫婦の寝室へ行くとベットの上のギャバ猫にこっそりと小声で話しかけた。

「すごく可愛いお家だね、ギャバ猫も気に入った？」

『まあまあだにゃ～。それよりもうち、むっちゃ腹へってンねん。裕幸さんに言って早くステーキ用意してもらってにゃ。』

「ああ、そうだね。でもどうするんだろう？レストラン・・は猫のままじゃ行けないし、やっぱりお買い物だったら、サムおじさんに連れてってもらわなきゃ、明日まで車がこないって言ってたし・・・。」

『じゃあ、うちは、人型に戻って荷物の片付けしとくから、ちゃんと大きいステーキ買って来てってお父さんに言っといてや？』

「わかった！」頷くと美香流は下へと降りて行った。

6話：初めてのスーパー

「お父さん！晩ご飯はステーキでしょ？」私は勢いよく階段を下りながら階段の手すりに身を乗り出してお父さんにいった。
サムおじさんが笑いながら言った。「美香流ちゃん、ステーキが食べたいのかい？じゃあ、どこかレストランに連れて行こうか？」
私は首を振って行った。「ううん、おじさん、今日はギャバ猫がお腹をすかせているもの。お家でお料理するからお買い物に連れてって下さい。」
「へえ、美香流ちゃんはしっかりしてるね。料理もつくれるのかい？」
「少し・・」といって口ごもる。実は目玉焼きや簡単なものしか作れないのだが、、、。
「よし、じゃあこの近くのスーパーに連れてってあげよう！」とおじさんが言った。

私とお父さんとサムおじさんはもう一度車に乗り込んで、スーパーへと出かけて行った。
すごく大きなパーキングに車を止めると、おじさんはにこにこしながら、ここで明日の朝食などの買い物もしとくと良いよ。といってくれた。
店内を見回すと、大きな買い物カートにいっぱい食べ物を詰め込んだ、太ったおばさんが目立つ。太ったといっても、それは日本で見る少し太ったおばさんではなく、本当に牛のように大きいのだ。大きな大きなおしりを目の前に美香流は唖然としてつぶやいた。
下手すると自分が3人ぐらい入りそうな大きなおしり用のパンツが売っているのだろう。アメリカって大きい！と美香流は変な所で感動していた。

お父さんが野菜や果物、他の色々な材料をカートに入れて行く。
「お父さん、うちにフライパンはあるの？」
「この間日本に帰られた日本人駐在員のお宅からまとめて買ってあるから必要最低限の物は揃っていると思うよ。まあ、片付けてないから、段ボール箱にまとめてあると思うけど。
「じゃあ、調味料とかも必要だね！」塩こしょうに、考えつく調味料を手当たり次第に入れて行く。「あ、お醤油とかってあるのかな？」
するとサムおじさんが、昔ながらの赤いキャップに入ったテーブル用の醤油を持って来て行った。「最近はヘルシーだとかっていって日本食ブームだからね、こんな田舎のスーパーでも醤油ぐらいは売っているさ。」

それにしてもアメリカのスーパーは広いだけでなく、売られている物もバラエティ豊かだった。真っ青なクリームの塗られたケーキは流石に美香流もびっくりしたが、小さな男の子がドーナツのおいてあるセクションにいって、扉を開けて一番下の端にあったクッキーを一枚取るとおもむろに食べ始めた。びっくりした美香流が見ているとその男の子と目が合い、そうすると、その男の子はもう一枚クッキーを取って美香流に差し出した。
何かを英語でいっているようだが、もちろん美香流にはわからない。困っているとサムおじさんが来て、その子に何か、言って、クッキーを受け取り、美香流に渡した。
「え？いいの？サムおじさん、だってこれ、お金払ってないよ？」
「大丈夫だよ。あそこの端に置いてあるクッキーは店のサービスで子供達がかってに食べて良いものなんだよ。」そういって手渡された、クッキーを一口食べてみたが、あまりの甘さにびっくりする。
そんな様子をまたサムおじさんが見て大笑いしていた。

その他、食パンや色んな物を入れると他のアメリカ人のおばさんの

カートのようにうちもぱんぱんに積み上がっている。こんなに買い物をするのは初めての事だった。
美香流は興味新々ですべてのラインを歩き回ってみて見る。
ああ、でも今回は初めだから良いとして、今度はギャバ猫お母さんも一緒にこなくては、わからないと、美香流は思った。
「できるだけ早く尻尾と耳を隠す練習してもらわなきゃ・・・」
最後にレジに並んでいると、見た事もない鮮やかなお菓子のパッケージが並んでいた。一つぐねぐねした赤く長いお菓子を手にしてこれは何だろうと考える。お菓子をじっと見ていた私にお父さんが、どれでも、美香流の好きな物を一つ買っていいよというので、迷ったが、一番最初に手にしたお菓子を最後にカートに入れておいた。

他の人達に負けず劣らずいっぱい買い物をした私たちは意気揚々とうちに帰って来た。サムおじさんは、用事があるから、また明日！といって荷物を下ろした後、帰って行った。
「いい人だね、サムおじさん。」私はお父さんに言った。
「そうだな、これからも色々とお世話になると思うよ。さあ、ギャバ猫お母さんがお腹をすかせているだろうから早く晩ご飯を作ろう！」
2階の窓から私たちが帰ってきたのを見てたのだろう、ギャバ猫お母さんが、人型で降りて来た。
「遅かったのねぇ。いったい何をそんなに買い込んで来たの？」そういうギャバ猫お母さんの姿をみて私はびっくりした。「あ！耳がない！」そう、ギャバ猫お母さんの頭からにょっきり生えていたふさふさのお耳が人間の物に変わっていた。
「ふふ、すごいでしょ？でもこっちはまだなのよね・・」と後ろを向くとふりふりの尻尾がぴこぴこと動いていた。でも快挙だね！と3人で和気あいあいと台所に向かって行ったのだった。

7話：初めての夜

「おいしい！」日本ではアメリカの牛は狂牛病で怖いなどとおばあちゃんが心配していたが、買って来た分厚い肉はとてもおいしかった。

「本当は外でＢＢＱにしたらもっとおいしいんだけどね、まだよく使い方がわからないんだ。」とお父さんがいう。確かに裏には黒いバーベキュー用の器具がおいてある。

ギャバ猫お母さんは念願のステーキをお腹いっぱい食べてご機嫌だ。ぺろぺろと口の周りを舐めながらう～んと伸びをした。

「明日はお父さんの車をサムおじさんと取りに行って、私の学校に行くんでしょ？なんかちょっと怖いなあ。」美香流は小学６年生だが、入るのは中学１年になるという。というのは、テネシー州の学校の制度は、５年、３年、４年制であるからしくいきなり同級生と違い中学生になるというのは心もとない。

「美香流が嫌だったら、１年学年を落として５年生から行ってもいいんだよ？」

「ううん、私頑張る。それに、最初はＥＳＬっていうのがあるんでしょ？他にも・・・日本人がいるといいのになあ。サムおじさんみたいな。」

「う、う～んサムおじさんみたいな小学生はいないと思うが、確かおじさんの娘の一人は同じ学校の上級生にいたと思うぞ？まあ、今日は美香流も疲れただろうし、シャワーを浴びてゆっくりと休みなさい。明日は、昼から、ここの家の大家さんにも逢うからね。」

確かに今日はすべてが初めて続きで興奮していたのか身体はとても疲れていた。私は二階にあがると、持って来たトランクの中から、歯ブラシとチューブ、そして旅行用の小さなシャンプーやリンスの

入ったバックを取り出して、洗面所に向かう。
トイレの便器に座りながら、お風呂も今までと違い、シャワーなんだとぼーっと考えた。
シャワーを浴び終わると、はたと、タオルが無い事に気がつく。洗面所から美香流は大きな声でギャバ猫お母さんを呼んだ。
「おかあさ～ん！お願い、ちょっと来て～！！！」しばらくするとお母さん姿のギャバ猫がやってきた。「なに、美香流？そんな大声だして？」
「タオル忘れちゃった！トランクにあるの持って来て！」
ギャバ猫お母さんはやれやれといった調子でタオルを持ってくると美香流に手渡した。そういえば、ギャバ猫お母さんは、お風呂には入らないのだろうか？確かギャバ猫はあまりお風呂が好きではなかった。お母さんは反対にお風呂が大好きだったが・・・。

「ねえ、ギャバ猫お母さん、お風呂は入らないの？ずっと籠の中だったから疲れているし、よごれてるんじゃない？猫の姿に戻ったら私が洗ってあげるよ？」
するとギャバ猫お母さんは嫌そうな顔をして私を見ていった。「まだ美香流に洗ってもらうほど年寄りじゃないわよ。私の中のギャバ猫は嫌がってるけど、人型の時は私の方が強いんだから、しっかりと後でシャワーを浴びさせてもらうわ。ほら、美香流もいつまでもそんな格好でいたら風邪引くわよ。早くパジャマに着替えるのにゃ！」

まだベット以外は何も置いていない南側の部屋に戻ると美香流は窓の外を見る。サブデビジョンと呼ばれる住宅街の中に美香流たちの新しい家があるのだが、青い街灯に照らされた家並みはとても可愛くて美香流はいよいよ自分が外国に来た事を実感するのだった。
大家さんが用意してくれていたのか、ベットには可愛い花柄のシーツが布団がちゃんとかけられていた。日本では今頃、お昼頃で、薫

子ちゃんや、みんなは給食を食べている頃なのだろうかと様々な事を思い描くうち、美香流は深い眠りの中に引きづり込まれて行った。

お父さんとギャバ猫お母さんが、その後、そっと部屋の電気を消しに来て、二人でよく眠っているわなんて話していた事など私は知る由もなかった。

ギャバ猫お母さんは夫婦の寝室に戻ると、夫に声をかけた。

「今更ながらだけど、あなたがこんなに順応力があるなんて思わなかったわ。」

「そりゃあ、最初は僕だって吃驚したさ。曲がりなりにも科学者だからね、どういう原理でこうなったのか色々考えたりもしたし・・・」

「・・・・私が怖くない？美香流はすぐに馴染んでくれたけど・・・・」

「そんなことあるもんか！涼子さんが死んでしまった時は美香流がいなければ後を追ってしまうぐらいに辛かったんだ。どんな形にしろ、君が戻って来てくれて僕は本当に感謝しているよ、ギャバ猫にもね。まあ、まさかギャバ猫が１００年近くも生きて来た猫だなんて思いもしなかったけど！」そういって小さく微笑む。

「ありがとう！裕幸さん！」そういって抱きついたが途端に術が解けてギャバ猫の姿に戻った。

「まったく・・涼子の魂もずっとお前達と一緒に居たいのはわかるけど、ずっと人型なんは疲れるンや。それにさっさと戻らんと、涼子に風呂入られてしまうとこやったからなあ。」

目をまん丸くしている裕幸に向かってギャバ猫が言った。

「まあ、裕幸はん、そないなことで、うちらの魂は混ざりあっとるけど二つの意識がちゃんとあるんや、涼子の事もうちの事もこれからよろしくやで？」

裕幸はそっとギャバ猫を抱くと言った。「はい、ギャバ猫涼子さん、

これからも僕と美香流をよろしくお願いしますね・・・」

8話：美香流、学校へ行くの巻1

「美香流、起きなさい！朝よ！」ギャバ猫お母さんが私を呼ぶ声が聞こえます。
「ふわっ～！」大きく伸びをして私はベットに起き上がる。ああ良く寝た。窓の外から鳥の声が聞こえる。ふと外を見ると真っ赤な鳥が窓際に居るのが見えた。
「わあ！すごい！真っ赤な鳥！なんて名前だろう・・」
私はわくわくしながら階段を下りて行く。

昨日の晩に買って来たパンを頬張りながらお父さんとギャバ猫お母さんが待っていた。
「ねえ！お父さん、今さっきすごく赤くて綺麗な鳥が窓の外にいたんだよ！」
お父さんは首を傾げながら言った。「赤い鳥・・カーディナルかな？」
「カーディナル？」

「ああ、たぶんね、今度鳥の図鑑を買って上げるからそれで調べてごらん？それよりも、美香流、お父さんと一緒に、先にサムおじさんと一緒に車を買いに行ってから、一緒に学校に手続きに行こう。その後はここの大家さんが見えられるから御挨拶しないとな。明日からお世話になる事だし・・・。」

「え？どうして？私、ギャバ猫と一緒にお留守番しておくよ？」
「う～ん、美香流、アメリカでは、１３歳以下の子供を一人で家に置いておく事はできないんだよ。そういう法律になっている。だから、これからお父さんが居ない時は、いつも近所に住む大家さんに来てもらうか、涼子さんが人型になっていてもらわないと行けない

んだ。」
日本とアメリカの文化の違いに驚きながら私は尋ねた。
「え、じゃあ、次の私の誕生日までは、ずっと他の人がお家に居るって事？」
「昨日、涼子さんとも話し合ったんだが、涼子さんができるだけ早く完璧に人間に変化する事が出来るようになるまでの間だけ、大家さんに頼もうと思っているんだ。それから、、アメリカで偶然、生前の妻と生き写しの彼女に逢ったという事にしようかと考えているんだけどね・・」
お父さんも、ギャバ猫お母さんの事、色々と考えているんだと思いつつ、私は頷いた。
「わかった。じゃあ・・・ギャバ猫お母さんがちゃんと人型になれるまでは、大家さんのお世話になるよ。でも・・大家さんってアメリカ人なんだよね？私・・大丈夫かなあ」英語がまったくできない美香流の中に一抹の不安がよぎる。

「大家さんは、この近くに住んでいて、家を行き来できるという理由もここを選んだ理由なんだ。大家さんには、美香流と同じ年の男の子が一人いるんだよ。今日一緒に挨拶に来られると思うけど、さっきも言った通り、美香流の誕生日までは、お父さんが会社から帰ってくるまでは、その人達と一緒に待っていてほしい。なあに、すごく良い方達だから美香流もすぐに慣れるよ！」お父さんはギャバ猫を撫でながらうんうんと頷いている。
「しっかりし～や、美香流。まあ心配せんでもすぐに慣れるやろ？もしその男の子にいじめられる様な事があったらうちが引っ掻いたるさかい、大船にのったつもりでおりや？」
「う・・うん」
それから私は急いで朝ご飯を食べて洗面を済ませ、服を着替える頃

には、サムおじさんが下で待っていた。「おはよう、美香流ちゃん、今日も良い朝だね～。さて、今日は車をゲットしにいくぞ～！」
「じゃあ、いってくるね、ギャバ猫！」
テンションが異様に高いおじさんにつれられて、私たちは、車のディーラーという所で、日本車の車を購入した。日本でお父さんが乗っていたのと良く似たタイプの車だった。
お父さんとおじさんがややこしい手続きを済ませている間、退屈して色んな車を見ていると、若い外人のお兄さんが笑って、チョコレートキャンディーをひとつ手渡してくれたので、それを食べながら待つ。最初は色々と話しかけてもくれたのだが、全然何を言っているのかわからないのでそのうち向こうも首をすくめて行ってしまった。ああ・・・今日からこんな日が毎日続くのだろうか。

買った車はその日の内に乗って帰れるという事で、私とお父さんはサムおじさんにお礼を言って、今度はお父さんにつれられて、私がこれから通う事になるというミドル・スクールへと向かった。車をパーキングに止めると、お父さんと私は連れ立って一緒に学校のエントランスをくぐる。玄関を入ってすぐ右に大きなオフィスの様なものがあり、お父さんはそこにすたすたと入って行くと、私を指差しながら何か言っている。持って来た書類などを手渡してそれで終わりかと思えばオフィスに座っていたおばさんは笑いながら大きく頷くと、私とお父さんに「ビジター」と書かれたシールを手渡した。もちろん私には何が書いてあるのか分からなかったが・・・
「お父さん、何コレ？」
「Ｖｉｓｉｔｅｒ＝訪問者と言う意味だ。今から学校を案内してくれるらしい、このシールにマジックで名前を書いて胸に貼っておくんだよ。それから明日、学校に入る前に予防注射をしないといけないのをすっかり忘れていたから、お父さんが予約をとるから明日、大家さんに連れて行ってもらわないとな・・・」

私はびっくりして声を上げた。「注射?!だって私、病気じゃないよ?」

「学校に入る前の規則なんだ。」お父さんはそう言って申し訳なさそうに笑った。

「Ｗｅｌｌ，　Ａｒｅ　ｙｏｕ　ｒｅａｄｙ　ｎｏｗ?」行きましょうか?と言うようにオフィスのおばさんが手を出した。私はおずおずとその手を取る。なんだかこれから売られて行く牛の様な気分だった。

9話：美香流、学校へ行くの巻2

「Ｈｏｗ　ｔｏ　ｐｒｏｎｏｕｎｃｅ　ｙｏｕｒ　ｎａｍｅ？」私の胸に貼られたビジターのシールを見ながらその人は言った。私は何を言われているのかわからなくて、つい引き越しになる。そうするとその人は自分を指して、「Ｉ' ｍ　Ｍｓ．　Ｍａｒｙ，　ｗｈａｔ　ｉｓ　ｙｏｕｒ　ｎａｍｅ？」ともう一度聞いてくる。名前・・・この人今ネームって言ったよね？私の名前を聞いてるのかな・・・・。

おそるおそる私は彼女に問いかける。「ネーム？」そうすると彼女が頷いた。

えっと、確か・・私は覚えたての英単語を並べる。「マイ・・ネーム　イズ　ミカル」

「ミーカル？」なんか微妙に違うが一応通じたみたいだ。私はこくりと頷いた。するとその人はニッコリと私に微笑んだ。こちらの人は目が合うとよく笑いかける人が多い。日本でそんな事をする人はあまり居ないと思うがお父さんがこちらでは挨拶のようなものなので慣れるようにと言っていた。とりあえず私も笑っておく。ちょっとほっぺたが引きつるのはご愛嬌という事で・・・。すると、その人はお父さんに何かを話しだした。何を話しているのかと不思議に思ってお父さんの手をぎゅっと握る。

「美香流、メアリーさんが言うには、一度校内を見回った後、良ければそのまま学校が終わるまで居てみないかと言われているんだが、どうだい？」

「え？それって、私一人でってこと？」

「ああ、不安かい？美香流が嫌ならもちろん無理にとは言わないが・・。」

はっきり言って不安だった。これからどちらにしろ一人で学校に通う事になるのだが、さすがに今日からいきなりだとは思っていなかったし、まだ心の準備が出来ていない。どうしようかと迷っていると、ジリリリリ～ンといきなり校内に響き渡るベルの音が響いた。廊下にずらっと並ぶドアから沢山の外人が出て来て一気に賑やかになる。私は驚いてその風景を見やった。なんだか映画を見ているような気分だったのだ。

また、隣で、ミス、メアリーが何事かを2、3個呟いた。お父さんが私に通訳をしてくれる。「どうやら、4時間目が終わってこれからランチだそうだよ。カフェテリアという所で食事が食べれるそうだ、美香流もいってみるかい？」
はっきりいってお腹は空いていたので、私は頷いた。ミス、メアリーが先に立って案内をしてくれる。今までずっと給食だった美香流にとってそれは初めての体験だった。
沢山の椅子とテーブルが合体したものが外の見える大きな窓の前に並べてあり、端のほうに、何人もの学生が並んでいる。

これが同じ年の学生なのだろうかと思うぐらい、大人っぽい子が多い。女の子達はお化粧やピアスをしている子達もいる。服装は私服のようだった。やはり父親と、ミス、メアリーに囲まれて立っている私は目立つのか、じろじろと遠慮無しの視線を浴びせてくる。なんだかとても居心地が悪かった。こちらを見ながらぺちゃくちゃと話をしている女の子達もいる。

本当に見渡すばかり、外人だらけだ。ふと遠くを見ると、黒髪の子も何人か居るみたいだが、聞いて見ると、その子達は、韓国人の学生らしい。沢山積み上げられているお盆を一人ずつとって、列にならぶと、給食のおばさんみたいな人が、お皿にマカロニのチーズ掛けみたいな物と茹でたブロッコリー、そしてころころとした形の揚

げたポテトを入れてくれる。飲み物は、ミルクやオレンジジュースなどを選んで、支払いを済ませると言った方式のようだ。私の前にいた男の子は食券みたいなものを渡して出て行った。

どうしよう・・私、食券なんて持ってないと青くなったが、お父さんが支払いを済ませてくれる。「一食分、大体$1、50セントらしいね。ほら見てご覧、こんな物まで売ってるよ。」見ると其処にはバナナやリンゴなどの果物に加え、とても大きなクッキーなどが置いてある。それにスーパーで見た見た目が派手なお菓子なども売られていて私は吃驚する。

あ、そういえば、買ってもらったお菓子、まだ食べてないなあ・・今晩、ギャバ猫と一緒に食べよう！

昼食はあまりおいしいとは言えなかったが、お腹は一杯になった。昼食の後、まだ3時まで学校があるらしい。体育館や図書室、コンピュータールームなど学校にあるすべての施設を回った後、もう一度、最後まで残るかどうか聞かれたが、美香流は力なく首を振った。さすがにまだ日本から来て2日目、まだ時差ぼけや疲れも残っている。

最後にミス、メアリーはまたねと言って手を振ってくれた。これから、この学校に通う事になるのだ。私とお父さんは、ミス、メアリーにお礼を言うと一緒に車に乗り込んで不安を胸に抱えたまま家へと帰った。

１０話：大家さん

家に帰ると私は車のドアを開けて家の中に入る。
「ギャバ猫おかあさ～ん？」リビングにも台所にも居ない・・が、ふと目を凝らして裏庭を見ればちょっとてっぷりと大きな姿をしたギャバ猫が庭に沢山来ている野鳥を追いかけているのだ。
「ギャバ猫！何してるの？！」がらっと台所から外に出られる扉を開け私は叫んだ。
ギャバ猫は私の方をみるとにやっと笑う。やっぱりこの笑いだけは慣れない・・・コワイ。
「なんや、美香流もう帰って来とったんか？　うち、新しいダイエット方法試してんねん。家の中でひなたぼっこしてたら、えらいこいつらがぴーちくぱーちくうるさいからちょっと脅かしたろかおもーてんけど、これが結構なかなかええ運動になってんねんで。最近ちと体重増えたさかい丁度ええわ。」

なるほど・・・それで鳥を追いかけ回していたのか。しかしどう見ても鳥に遊ばれているようにしか見えない・・気もするがそれは言わないでおこう。
「なんだ。吃驚した・・」
「そんな事より、美香流学校いってきたんやろ？どうやった？新しい学校は？」
「う、ウン・・・。なんかいっぱい外人さんがいて、全然日本の学校と違ったよ・・・」
「そんなん当たり前やろ！なんや弱気になってんのか？ちょっと待ちや。」
ギャバ猫はお母さんに変化すると、私の頭をよしよしと撫でてくれた。「大丈夫よ、美香流。きっとすぐに友達も出来て楽しくなるわ。」

「・・・そうかなあ？」
「そうよ。それに今日の４時に大家さんがお子さんを連れてくるんでしょ？美香流の初めてのボーイフレンドになっちゃうかもよ？」
「・・・・ママって単純だね。まあいいや。なんだか今日はとっても疲れちゃった。大家さんがくるまで２時間ぐらいあるでしょ？ちょっと昼寝してくるね。」
そう言うと私は２階に上がりあっという間に寝てしまった。緊張して慣れない英語を聞くのはとても疲れるという事を知った一日だった。

リビングではお父さんとギャバ猫お母さんが話していた。
「なんだ、美香流のやつ、もう寝ちゃったのか？」
「なんだか、疲れちゃったらしいわ。あの子大丈夫かしら、これから・・・」
「そうだな、まあ最初は大変かもしれないが、慣れたらきっと楽しくなるだろう。」
「ねえ、あなた。その大家さんってどういう人なの？美人？」
裕幸はぷっと吹き出して涼子の顔をまじまじと見た。ギャバ猫と涼子、両方の記憶と性格をもつ妻だが、人型の時はやはり涼子のままだった。
「そうだな。昔は美人だったかもしれないが今は随分と恰幅の良いおばさんだよ。こちらの女性は結婚して数年経つと驚くように姿が変わっている人が多く居ると聞くからね。」

「そうなの？ふうん・・・」
「まさか僕が浮気でもしないかと心配している訳じゃないよね？」
「そう言う訳じゃないわ。ちょっと気になっただけ。それに美香流もこれから、その人にお世話になる事だし・・・できるだけ早く完璧に人型になれるようにしないとね。」

「ああ、そうだね・・僕も明日から仕事だし、美香流のこと、宜しく頼んだよ。」
「まあ、まかせなさいって！」
二人で顔を見合わせて笑う。それから時間が過ぎ、４時半頃になると、家の中にチャイムが響き渡った。猫の姿にもどったギャバ猫は二階の部屋へと上がっていく。美香流は１５分前におきて寝癖を直すために洗面所にいた。
下からお父さんと、聞き慣れない客の声がする。
「大家さんきはったで」ギャバ猫が小さな声で美香流に声をかけた。
「うん、わかってる、今いくよ。ギャバ猫はどうするの？」不安そうな美香流の様子を見て仕方なさそうに腕に抱かれると一緒に階段を下りていく。

するとひと際大きな声が響いた。「Ａｈｈｈ，　Ｔｈｅｒｅ　ｓｈｅ　ｉｓ！」まるっと太った外人のおばさんが私に近づいてきていきなり抱きしめる。私とギャバ猫は吃驚して硬直したままだ。
丁度、そのおばさんに抱きしめられたまま、後ろに立つ男の子と目があった。綺麗な青い目・・目があってにっこりと微笑むこの男の子が大家さんの息子なのだろう、確か同じ年だといっていたが、日本でのクラスメートの男の子達より、なんとなく大人っぽい雰囲気だ。
大家さんがやっと美香流を解放してくれると、後ろに立っている男の子を紹介する。
「Ｈｅ'ｓ　ｍｙ　ｓｏｎ，　Ｊａｍｅｓ．＝私の息子のジェームズよ。」
とりあえず、昨日習ったばかりの挨拶を返す。「えっと・・Ｎｉｃｅ　ｔｏ　ｍｅｅｔ　ｙｏｕ・・・？」自信がないのでどうしても最後らへんは小さな声になってしまう。
よく出来ましたと言わんばかりに大げさに褒めてくれるおばさんと、知的そうで大人しいジェームズとの出会いは始まったばかりであっ

た。

１１話：大家さん２

お父さん達が何かを話している間、美香流は、ジェームズ君に色々教えてもらったら？と言われたものの、言葉がわからないのに何を教えてもらえば良いのか・・・リビングのソファでくつろぐ彼を見ながらこっそりと息を吐いた。

しかし、すらっとして均整のとれた少年らしい体つきといい、整った顔といい、こんな男の子はきっともてるんだろうなあとぼんやりと考える。というかこんなこと考えている時点でなんだかおばさんっぽいなあと思う。

私の遠慮の無い視線に気がついたのか、ジェームズ君が読んでいた本から目を上げて私を見た。にっこりと笑って何か話しかけてくる。どうしよう・・・。

一瞬パニックに陥った私は、本を指差して言った。「Ｗｈａｔ　ｉｓ　ｔｈｉｓ？」って本に決まってるだろう！と自分でもツッコミを入れたくなるが、顔を真っ赤にした私に彼は何かを一生懸命説明してくれる。もしかしたら、この本の内容を聞いたのかと思って説明してくれているのかもしれないが。説明してくれる内容は一切わからないが、とりあえず頷いておく。日本人の悪い癖だ。

すると、ギャバ猫がとことこと歩いてくると、とんとソファーの上に飛び乗り、ジェームズ君の側までいくと、頭を彼にすり寄せて甘えた仕草をする。

実はちょっと前に分かった事だが、ギャバ猫はかなりのイケメン好きだった。テレビでカッコイイ男の人が映っているとかならず、テレビの前の特等席を陣取ってそこから動かない。が、あまり好みでない人が映るとふいっと顔を背けてしまう。なんだかこの態度もあからさまだなあと思いながらも、ジェームズ君の説明が止まり、ギャバ猫へと集中したので少し助かる。

彼は猫好きなのか、猫を抱き上げると頭を撫でたりして手慣れた様子だ。彼は私の方を見て猫を指差して言った。「Ｗｈａｔ　ｉｓ　ｙｏｕｒ　ｃａｔ's　ｎａｍｅ？」
今、猫の名前って言ったよね？ちょっとした単語なら分かる。でもどうやって答えればいいんだ？ギャバ猫・・・・えっと、ギャバ猫だから・・「ｇｙａｂａ・・・ｃａｔ？」
ジェームス君は小さく答えた私の声をじっくり聞いていたらしく、聞き返して来た。「ｇｙａｂａ　ｃａｔ？　Ｗｈａｔ　ｉｓ　ｔｈｉｓ　ｍｅａｎ？」え？もうわかんない？何？
えっと・・・「Ｈｅｒ　ｎａｍｅ　ｉｓ　ｇｙａｂａ　ｃａｔ」とりあえず今度はちゃんと言いなおしてみる。
多分理解はしていないかもしれないが、彼はちょっと首をすくめるとギャバ猫の事を「Ｇｙａｂａ」と呼んだ。ギャバ猫は私のほうをちらっと見ると仕方なさそうに、「にぎゃ～」と不思議な声で答える。でもそれを聞いたジェームズ君は満足そうに、もう一度ギャバ猫の頭を撫でた。

しばらくするとお父さんと大家さんがリビングに戻ってきた。といっても二人は台所にあるテーブルで色々と喋っていたのだが・・。
「美香流、ジェームズ君とは仲良くなったみたいだね。学校も一緒だからこれから何かあったらきっと彼が助けてくれると思うよ。とりあえず、明日注射を終えて、明後日から学校なんだけど、行き帰りは、ジェームズ君と一緒に、大家さんが連れて行ってくれるからね。それで、僕が帰ってくるまでは、大家さんのお宅に居る事になると思うけど・・・美香流大丈夫かい？」
大丈夫もくそも不安でいっぱいだが、お父さんもお仕事できているのだから、甘える訳にはいかない。でも、ギャバ猫はどうするんだろう・・・。

「おとうさん、ギャバ猫は？」

「大丈夫・・その辺は抜かりないよ。たぶんギャバ猫もしばらくはうちと大家さんの家を行ったり来たりするだろうし」

「Ｏｋ，Ｗｅ ｇｏｔ ｔｏ ｇｏ，Ｓｅｅ ｙｏｕ ｔｏｍｏｒｒｏｗ，Ｍｉｋａｒｕ．＝そろそろいかなきゃ、じゃあ、また明日ね、ミカル」そういって大家さんは来たときと同じように私をぎゅっと抱きしめた。これが俗にいうハグと言う物なのか・・・。ぼーっとしてると、今度は、ジェームズ君まで、私を軽く抱きしめて「Ｂｙｅ，Ｍｉｋａｒｕ」と言って出て行った。ただの挨拶だとは分かっているがどうもなれない。同じ年の男の子にこんなに接近されたのは初めてだった。二人が車で去ると、私はどっとまた疲れてソファーに座り込んだのだった。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

その頃、車の中ではジェームズと、母のステラが話していた。（喋りは英語ですが、日本語に変えます）

「どうだった？ミスター堀内の娘さんは？可愛かったでしょ？私も今日初めてあったけど、以前写真で見せてもらったのより小さくて可愛かったわ。」

「そうだね。言葉はあんまり分からないみたいだったけど、一生懸命な所が可愛いよ。」

「明日から暫くの間、うちで面倒を見る事になっているから、しっかり面倒をみてあげるのよ？」

「ああ、うん、分かってる。暫くってその後は？彼女お母さんいないんだろ？」

「そうなのよね、遠慮しなくていいいいって言ったけど、そのうち、住み込みのお手伝いさんを雇うとかなんとかって言ってたわ。」

「ふうん・・・そうなんだ。」

「明日はあなたを学校に送り届けてから、彼女を連れて予防注射を受けに行くわ、その後は夜までずっとうちに居るから・・そうそ

う、暫く彼女がなれるまでは、遊びの約束控えてね？」
「分かったよ。」ジェームズはミカルとそして、ギャバという変わった猫の事を思い出してくすりと笑う。なんだかこれからが楽しみだった。

１２話：日常

注射は結構あっけなく終わった。次の日の朝、迎えにきてくれたステラおばさんと一緒にジェームズ君を学校に連れて行った後、小さな病院へ行く。
問診表はお父さんがインターネットでダウンロードして書き入れてくれていた物を提出した。
しばらくして名前を呼ばれる。やっぱり変な呼ばれ方だった。美香流って言いにくい名前なのかなあ？
ステラおばさんも一緒について来てくれる。言葉がわからない私の為に看護婦さんと二人でジェスチャーで意思疎通しようとしてくれるのはありがたいが、あまりの大げさなジェスチャーに笑いがもれる。
看護婦さんが、すーっとする綿のような物を腕に塗って、いきなり肩にぶすっと注射を突き立てた。っていうか、握り方！それどう見ても注射をもつ手じゃないでしょう！まるでシャーペンを握るように注射を持って肩に突き立てる。鈍い痛みが走った。なんだかいきなり筋肉痛にでもなったかのようだ。何がなんだか良く分からないままに病院をでると、おばさんは私の方を見て大丈夫？とでも言うようにニッコリ笑う。

これからどうするんだろう・・・ギャバ猫お母さん、うちできっとのんびりしてるんだろうな・・と考えながらまた車に乗ってどこかに行くようだ。
日本だったら、私一人でも電車やバスに乗って行く事ができたけど、ここではほとんど子供だけで出歩く事なんてないらしい、というか、無理そうだ。何処に行くのでも遠すぎる。まだ来てから3日しかたってないのに、既にコンビニが懐かしかった。

次に連れて行かれたのは、ウォールマートというでかい店だった。日本で言うジャスコ？とか思いながら入って行く。おばさんが、私を引き連れて向かった先は、ノートやファイル、筆記用具などが並ぶコーナーだった。もしかして学校の準備？
おばさんはまたまたジェスチャーでどれが良い？というような事を聞くので、適当に何冊かのノートやファイルを選ぶ。というか・・・なんでこんなにファイルやノートが必要なの？！
アメリカのノートは日本のとは違い、びりびり破る事が出来るようになっている物が多い。
ちゃんと切れ目までついている。なんでだろう・・・ノートをそんなに破ることってあるの？！

一通りの物を買いそろえると、私たちは、おばさんの家へと戻って来た。
やっぱりアメリカのお家って広い！おばさんの家はとてもカラフルだった。えんじ色に塗られた壁や花柄のソファー、違う部屋に行くと今度は壁紙が青だったりとちょっと吃驚だ。
「Ｍｉｋａｒｕ，　ｐｌｅａｓｅ　ｍａｋｅ　ｙｏｕｒｓｅｌｆ　ａｔ　ｈｏｍｅ，　ｏｋａｙ？＝ミカル、自分の家だと思ってくつろいでね。」
なんだか分からないがとりあえず、ｏｋと言っておく。おばさんは台所（これもすごく広くて綺麗、料理をしている雰囲気がまったくない）に行くと、冷蔵庫を開けて何か説明してくれる。
どうやらここに飲みものがあって、グラスがここなどと言っているようだ。勝手に開けて飲めと言っている様な気がする・・・。
「えっと、オープン、テイク、ジュース、オッケー？」とりあえず知っている単語を並べて連発すると、オッケーだという。以外にこんなのでも会話が通じるんだなあと感心。
でも明日からの学校はやっぱりちょっと不安だった。ソファーに座

ってオレンジジュースを飲んでいると、庭先にギャバ猫の姿が見えた。私はあわてて庭の方へ駆けて行く。おばさんはテレビをみているので気がついてなさそうだ。
がらっと、庭へ通じるドアを開けて、おばさんのスリッパらしき物を履いて外へでる。おばさんはガーデニングも好きなのだろう、色んな花が咲き乱れている。

「ギャバ猫、どうしたの？」わたしはギャバ猫を抱き上げてそっと聞いて見る。
「うんにゃ、美香流の様子見に来ただけや。どうや？今日一日大丈夫やったか？」
「う、うん、なんとかなったと思う。」私は手短に今日の出来事を話す。
「ふうん、そうか、明日から学校やからなあ。まあしっかりがんばりや、うちは、ちょっと家に戻っとくわ。また後でな、美香流」そう言うとギャバ猫はとんっと私の手からすり抜けて垣根を超えて行ってしまった。冷たい猫だ・・・。

家の中にもどって時計を見ると、もうすぐ3時になる。そういえば、学校は3時ぐらいに終わるんだったっけ？ジェームズ君を迎えに行くのだろうか・・。
ステラおばさんの所に行って、時計を指差し、「ジェームス、カム、ホーム？」と、また片言で聞いてみる。おばさんは時計を見ると、首を振っていった。
「No，he has football today，so I will go to pick him up on 5 pm．＝いいえ、今日はフットボールがあるから5時に迎えに行くのよ。」
フットボール？って今言ったのかな。ゆっくり話してくれるけど、それでも所々の単語しかわからない。でも首を振っている所をみる

と、まだ行かないという事だろう。
日本にいたときは1日がこんなに長いなんて思った事はなかったが、
アメリカに来てからはとてもゆっくりと時間が流れている様な感じ
がしてとても不思議だった。

１３話：ギャバ猫、牧場へ行くの巻１

朝、ステラおばさんが迎えに来て、夜お父さんが迎えにくるまでは、おばさんの家で過ごす・・そういった日々が始まって１ヶ月が経った。美香流はアメリカに来てから毎日、日記をつけるようになった。これはお父さんからの提案でもあり、学校での出来事や日々の事を書き綴っている。

学校の事については、色々と書く事があるけど、それはまた次回語る事にしよう。今日は週末の土曜日でサムおじさんが久しぶりに私たちを連れて知り合いの農家をやっている人の所へ連れて行ってくれるという。もちろんギャバ猫も一緒にだ。サムおじさんの娘二人も一緒に行く事になり、２台の車に別れて私たちは農家へとやってきた。車で１時間かそこら走るか走らないかでそこはただ広い牧草がずっと先まで生い茂る牧草地帯だった。

牧場の中にある、大きな家の前に車を停めるとサムおじさんは指をさして言った。「ここの牧場は、１２０エーカーあるんだよ。そこで牛や馬を飼っているんだ。」

「エーカーって何？」私はギャバ猫を抱いたまま聞いてみる。

「ああ、エーカーって言うのは土地の広さの事だよ。丁度、１エーカーで日本の１２００坪ぐらいかなあ。」とおじさんは呟く。

坪と言われてもあまりピンとこないが、ともかくとても広いという事なのだろう。

私たちの事を待っていたのか、家の中から、大きなおじさんと小さな女の子が出て来た。この人がこの牧場の持ち主なのだろうか。私はサムおじさん達の後をついてゆっくりと歩いて行く。

一通りの挨拶が終わった後、サムおじさんが説明してくれた。やは

り彼、（名前はデービットさんと言うらしい）がこの牧場の主で、小さい女の子、キャシーは6歳で彼の娘らしい。
これから飼っている牛や馬に逢わせてくれるというので、私たちはそのおじさんの後をついていった。牛達は今の時間放牧しており、すぐに見られるのだと言う。

朝の露を含んだ牧草からは日本で嗅いだ事のない深い緑の匂いがすると同時にふんわりと独特の匂いが鼻をつく。「なんかちょっと臭い～」私はギャバ猫を下ろして鼻をつまんだ。ギャバ猫はそんな私をちらっとみると先に走っていく。
「あ、まってよ、ギャバ猫！」私もギャバ猫の後をついて走り出すと、サムおじさんの娘の涼子お姉さんが私を見ながらくすくすと笑っている。なんだか少し恥ずかしくなってしまった。
私はギャバ猫を抱き上げると、もう、ギャバ猫のせいだよ！と小声で言う。
何をいっているんだと言わんばかりにギャバ猫の目が吊り上がる。さすがにこんな所で喋ったりはしないが一気に機嫌が悪くなったギャバ猫は、軽く私の甲を引っ掻くとまた腕の中から滑りだして走って行ってしまった。
「あ～あ・・・行っちゃった・・・」
暫く歩いて行くと、沢山の牛の群れの中に入っていく。牛達の周りにはぶんぶんとハエがたかっている。牛が尻尾をぶんぶんと揺らす度にハエもその動きに合わせて動いている。
それにしても大きい。車で通り過ぎる時に見たときはそんなでもないと思っていたが、普通の日本で見た事のある牛と、それよりも一回りぐらい大きい牛がいる。
おじさんに聞いて見ると、デービットさんと話して通訳してくれる。
「この牛は、バッファローとの掛け合わせなんだよ。」
「バッファローって？」
「ああ、美香流ちゃんは見た事がないかもしれないね～。とても大

きなもじゃもじゃの動物だよ。アメリカの国立公園なんかに行くと野生のバッファローが見れるだろうね。今度休みがある時にお父さんに連れて行ってもらった良いかもね。」
「ふうん、そうかあ。じゃあ、今度お父さんに頼んでみるよ。」私は心のノートにしっかりと刻み付ける。
「あ！ギャバ猫！」私は一頭の牛の上で寝そべっている猫を発見する。のそのそと歩く牛に揺られて超まったりしているっぽい。とその時一頭の牛が美香流の側までやってきてねっとりとした鼻をくっつけて来た。ひやっとした感触に吃驚して叫ぶ。
「もう驚かさないでよ！」牛に文句をいっても仕方ないのだが叫ばずにはいられない。
とっさにギャバ猫を見ると声にだして笑ってはいないもののどう見ても目が笑っている。なんだか悔しい。お母さんの姿のときはともかく、ギャバ猫は自分と姉妹のように育ったこともあり、ギャバ猫が喋るようになってからはなんだか変に対抗心を燃やしてしまうのだ。私だってちょっとびっくりしただけで、別に怖がってなんてないんだから！

私はギャバ猫の視線を感じつつゆっくりと牛さんに手をさしだした。が、さっきはいきなり舐めてきたのに、今度はうんともすんともいわない・・・。あいかわらず、まわりにハエはぶんぶんとうるさいし、がっかりしているとお父さんがやって来て、今度は馬に乗ってみようという。
現金な私はすぐに飛びついて、お父さんと一緒に歩き出した。

１４話：ギャバ猫、牧場へ行くその２（前書き）

お待たせしました。連載再会します。まあ暫くはカメ更新になると思いますが、よろしくお付き合い願います。

１４話：ギャバ猫、牧場へ行くその２

お父さんと私が連れ立って歩いているとギャバ猫が後ろからゆっくりと距離をとりつつついてくるのが見えた。しめしめ、やっぱり一匹だけ残されるのは嫌なんだ。こっそり笑うと私は意気揚々と馬小屋の中へ入って行く。中へ入ると既に、サムおじさん達はすでに馬に乗っていた。私もさっそく、手伝ってもらいながら、馬に乗ってみる。とはいえ、一人じゃ怖いのでお父さんと一緒だ。乗って見ると意外に高くて吃驚する。

「それじゃ、行こうか」

手綱の動きに合わせてゆっくりと馬が歩き出した。もちろん馬に乗るのは初めての事なのでわくわくしている。今回のコースはゆっくりと牧場を横切って帰ってくる３０分コースらしい。ちらっと後ろを振り向くとギャバ猫がちゃっかりと一緒に乗っていた。どうやって乗ったんだろう。牧場の中には沢山の動物も居るが、結構動物の骨なんかもゴロゴロと転がっている。

夜中に肝試しをしたらきっと怖いんだろうなと考えている間にあっという間に３０分たってしまった。

ハエや小さな虫に驚いて悲鳴を上げる私と違って、牧場で育ったキャシーは木の枝で動物の周りにたかるハエを追っ払ったり、牧場の端を流れる小さな小川近くで蛇を手で生づかみしたりと、とてもたくましかった。さすがに毒蛇だと怖いが、その辺の知識はこんな幼い頃からしっかりと身につけているようだった。

帰り際に、今度はパンプキンパッチをしにおいでと言われた。

「お父さん、パンプキンパッチって何？」

「ああ、１０月に入ると、牧場の中にある巨大なトウモロコシ畑を使っての巨大迷路や、ハロウィンに使うカボチャを取りに行ったりするらしい。」

「へええ～、なんか面白そうだね。」
「ああ、また今度連れて来てあげるよ。」
「約束だよ！」
そう言って私たちは牧場を後にした。今度ここを訪れるのは１０月以降になるだろう。
お父さんは、サムおじさんと、また近くの川でマス釣りに行く話をしていたが、それを聞いていたギャバ猫の耳がぴくぴくと動いていたのを私はしっかりと確認した。
絶対に密航してでもついて行くに違いない。あ、でもお父さんだったら絶対に一緒に連れて行くだろうけど・・・。
マス釣りをする為には、その州ごとのパスを買わないといけないそうだ。１日パスや、年間パスがあり、近所のスーパーやＷａｌ－Ｍａｒｔでも手に入るらしい。今度釣りの道具を買いに行くとお父さんもほくほく顔だった。

日本に居た頃は、お父さんも仕事が忙しくて、あまり外で遊ぶといったイメージはなかったのだが、こちらに来てからは、日本のように２４時間開いているコンビニがあるわけでもないし、自然以外で人口で作られた遊びがものすごく少ないように思える。
だから、みんなキャンプをしたり、釣りに行ったりと、自然で遊ぶ事が多いのだろう。

家に帰ると、私もギャバ猫もはしゃぎすぎたのか疲れてしまって、お風呂にはいるとすぐに寝てしまった。まだ、アメリカの生活は始まったばかりだ。

＊＊＊

アメリカに来てから、約３ヶ月が立とうとしていた。ギャバ猫はしっかりと尻尾と耳なしで人間に変化することが出来るようになり、

最近では少しずつ、私のベビーシッターと言う事でちょくちょく他の人の前にも姿を見せるようになって来た。変化していられる時間も随分と長くなってきた。
こちらでは、誰もお母さんの顔を知らないので、平然とお母さんの姿のままである。お父さんはそれが嬉しいのか毎日ほくほく顔だ。

私はというと、少し学校の生活に慣れて来た事もあり、ジェームズ君とステラおばさんのすすめで、ブラスバンド部に入部した。こちらの学校は、ある意味クラブ活動が日本よりも盛んで、クラブ内の結束は固く、私もバンドに入ってから、沢山の友達が出来た。
まだまだ、普通に会話をするには語学力が足りないのだが、なんとなく雰囲気で伝わる事もあり、なかなか充実した毎日を過ごしていた。
そんな私に初めての、誕生日会&お泊まり会の招待状が届いた。クラスと、そしてバンド内でとても仲良くしてくれている、エイミーからだった。
家に帰ると私はすぐに招待状を取り出してギャバ猫お母さんに見せた。
「どうしよう！お誕生日とお泊まり会の招待状もらっちゃったよ！」
「へえ、良かったじゃない。何時なの？」
「えっと、来週の土曜日！」
「ふうん。何もっていけばいいのかしらね？」
「う～ん。やっぱりお誕生日プレゼントと、後、お泊まり会でエイミーが枕をもってこいって言ってたよ。」
「は？枕・・・？」
私は聞き取りに自信がないのでおずおずと答える。「「う、うん、確かピローって枕の事だよね？」

１４話：ギャバ猫、牧場へ行くその２（後書き）

次回は美香流初めての誕生日会＆お泊まり会です。

１５話：始めての誕生日会１

始めての誕生日会。それはある意味美香流にとってはアメリカ社交界初デビューの様なものだった。改めて、貰った招待状をしげしげと眺める。夕方帰って来たお父さんがいうには、誕生日会自体は、「ジェリービーンズ」と呼ばれるスケートリンクを借りてやるそうだ。その後、エイミーの家でお泊まり会が待っている。

美香流はその晩、どきどきしてあまり眠れなかった。あっという間にエイミーの誕生日パーティーの日が近づいて来た。どんな格好でいけばいいのかさえ最初わからなかったのだが、近所に住むステラおばさんに聞きに行った所、スケートリンクに行くのだから動きやすい格好で行きなさいと言われた。後はお泊まりの道具を揃える。

エイミーへの誕生日プレゼントは彼女が可愛いといっていた日本のキャラクターものをおばあちゃんからわざわざ送ってもらった。吃驚したのだが、アメリカで、これほど日本の漫画やキャラクターが浸透しているとは思ってもいなかった。本屋さんに行けば、日本の漫画コーナーがあり、美香流も見知った日本の漫画の英訳版が所狭しと置いてある。残念ながらそれを読んで理解できるほど英語が達者でもないが知っている漫画をちらほらと立ち読みして絵を追うと、ストーリーが思い出せるのが楽しい。

日本ではもう美香流たちの年頃の子は話題にも上らないだろう、セー〇ームー〇や古い漫画の話題で盛り上がっているのを見ると吃驚する。斜め前の席に座っている男の子は「〇に変わっておしおきよ」と書かれたキャラクターの下敷きを自慢げに披露していたが、一体あんなものどこから手に入れたのか、そちらの方が不思議だった。

どきどきしながら美香流は車に乗り込み、家から２０分程離れた場所にあるスケートリンクへと連れて行ってもらった。

おずおずと建物の中へ入るとチケットを買うカウンターの様な所がある。私はエイミーから貰った招待状を取り出すと、受付に座っている高校生ぐらいのお兄さんにそれを差し出した。お兄さんはちらっとカードを覗き見ると、「Ｃｏｍｅ　ｉｎ！　Ｗｅｌｃｏｍｅ　ｔｏ　ＪｅｌｌｙＢｅａｎｓ！」といって扉を開けてくれた。
一歩中へ入るとそこは不思議な空間だった。何処からかピザのチーズの匂いが漂ってくるし、スケートリンクは思ったより暗くて、天井にミラーボールがくるくると回りながら光っている。一瞬唖然として固まった私の名前を外人なまりで呼ぶ声が聞こえた。
「ミキャル～」私の名前はミカルであって、断じてミキャルでもミコルでもないのだが、この名前、どうもアメリカ人には発音しずらいらしく、何度教えても正しく発音してくれる子は少ない。
「エイミー！」Ｔ－シャツとジーンズ、そしてパーカーを羽織ったエイミーが駆け寄ってくるのが見えた。そのまま手を引っ張られて、隔離された一室へと入って行く。ふうん、スケートリンクなのにこんな場所があるんだ～。とまた私は変な所で感心していた。
その部屋はこういった誕生日パーティーなどに普段使われているのだろう・・其処には見知ったクラスメートや、あと幾人か知らない子達の顔ぶれがあった。

テーブルの上には、ペパロニやチーズといったアメリカ特有のピザが並べられており、それぞれの席の前にはＨａｐｐｙ　Ｂｉｒｔｈｄａｙと書かれた紙皿と紙コップが置いてある。
以前学校で見た事のある、エイミーのお母さんが、よく来てくれたわねと言って（と思う）ハグをしてくれた。クラスメート達も、私の顔を見ると、それぞれＨｉ！とかいって挨拶してくれるので、私もとりあえず、Ｈｉ！と言って置く。

見た事の無い子達はどうやらエイミーの幼馴染みで、他の学校に通っているらしい子達だった。日本からやってきたミカルという紹介

に、女の子達の目がキラキラと輝く。
一体何を期待されているのだろうか・・・汗）
自己紹介を終えると、持って来たプレゼントを部屋の一角に置いて置く。幾つかのプレゼントが置いてあったからきっとここに置いとくのだろうと考えた。案の定、エイミーはニコニコして何も言わないので、導かれるままに、席に着いた。
しばらく飲み食べした後、ジェリービーンズの店員さんのお兄さん達がグロッサリーで見たすごい色のバ？スデーケーキを持って来てくれた。赤や緑、黄色と言った原色の着色料が目に眩しい。みんなで歌を歌って、エイミーが蝋燭を吹き消す。
あっというまに原色ケーキは切り分けられ、お皿が回って来た。べっとりと白いクリームが付いた中は真っ赤な色をしている。不思議に思って尋ねると、ベルベットケーキと言うらしい。というか・・・赤過ぎです。

皆がおいしそうにケーキを食べるので、私も思い切ってフォークを突き刺し、口の中に入れてみる。やっぱりすごく甘い！生クリームではなく砂糖で出来た様なフロスティングやアイシングがざらざらとした食感で口の中に広がる。でも赤いケーキは其処まで甘くはない。
私はこっそりとアイシングを取り除いて中身だけ食べる事にした。
隣に座っていたティーナがなんで其処だけ残すの？と不思議な顔をしているが、無理なものは無理だ！

１６話：始めての誕生日会２

ケーキを食べ終わると、エイミーがみんなから貰ったプレゼントをその場で開け始めた。
綺麗にラッピングされた箱や手提げ袋を前に、エイミーはひとつづつ開いては貰った相手に満面の笑みでお礼を言い、そしてカードを見てはクスクスと笑う。
あっというまにテーブルはエイミーがびりびりに破いたラッピングペーパーで覆われる。豪快だ・・。日本にいた頃、お客さんから何かもらっても、母の涼子は美香流が包みをびりびり破るようには躾けてこなかった。ちゃんと綺麗に開けるようにと言われていたものだが、アメリカにはそういう習慣はないのだろうか。

嬉しそうにプレゼントを開けるエイミーが最後に手に取ったのは美香流が日本から取り寄せた某キャラクターグッズだ。以前から、エイミーは学校で、美香流が使う小物やシャーペンなどに興味を持っていたので、そういう同型のものを・・と思ったのだが喜んでくれるだろうか。
昨晩、ギャバ猫お母さんが綺麗に和紙を使って包んでくれた品物、これも他のプレゼントのようにびりびり破るかと思えば、女の子達は皆ため息をついて、その包装されたプレゼントを眺めている。
「Ｈｏｗ　ｇｏｒｇｅｏｕｓ！　ーなんて綺麗なの？」そう言いながらエイミーは気をつけてラッピングを剥がしている。どうやらお気に召したようだった。そして箱を開けた途端、悲鳴に近いエイミーの驚喜した声が響いた。
「Ｏｈ！！！」小物を一つ一つ手に取っては、嬉しそうに悲鳴を上げるエイミーを周りの女の子達も羨ましそうに見ている。
「Ｔｈａｎｋ　ｙｏｕ　Ｍｉｋｙａｒｕ~！！！有り難う、ミキャル～」と言いながらエイミーは美香流に抱きついて来た。ここまで

狂喜乱舞されると日本から取り寄せたかいがあったと言うものだ。

さて、その後、パーティールームを出るとお待ちかね？のスケートタイムだ。カウンターに行き、靴のサイズを言うと、お姉さんがスケート靴を出して来てくれる。靴を履き終えると慣れた様子で何人かの子達がスケートリンクへと滑って行く。

実のところ、美香流はスケートをするのは始めてだった。こわごわと一歩踏み出すととりあえず歩けるものの、友人達のように軽やかに滑るのとは程遠い。

エイミーが近づいてくると、簡単にストップの仕方や、滑り方を教えてくれる。後は慣れとでも言わんばかりに美香流の手を引っ張るとスケートリンクまで連れて行った。

暫くの間、皆が滑るのを見ながら壁に手をつきつつゆっくりと滑ってみる。パーティールームは貸し切りだったが、スケート場自体は普通に開いているので、他のお客さんも沢山いる。がんがんと流れるアップテンポのミュージックと最初に目についたミラーボールがやけに眩しかった。

やはり慣れないからか、３０分もすると普段使っていない筋肉を使った為か、足が痛くなって来た。美香流は一足先にスケートリンクを抜け出てベンチに座っている事にした。

それからまた暫くたつと、高校生らしきお兄さんやお姉さんが出て来て皆を中央に呼び集め、歌いながらダンスをし始めた。見ている分には面白いが、同じ事をやれと言われたら少し引いてしまう。子供から大人まで乗りに乗ってダンスをするのは素敵だが、美香流はまだ恥ずかしい思いの方が先にたつ。

皆が滑り終わると靴を返して、今度は、エイミーのお母さんの運転する車と、エイミーの幼馴染みらしいジーンのお母さんの車に別れてエイミーの家まで向かうのだった。

しばらくすると美香流でも目に見て分かる様な高級住宅街へと入って行く。どの家を見てもかなり大きい。車の車庫が3～4台はいるスペースがある。吃驚しながら見ていると車はそのうちのＣｕｌ－ｄｅ－ｓａｃと呼ばれるその道の終点、サークルになっている場所にある4件の家の中の一軒に入って行った。

「でかっ！」つい日本語で叫んでしまうぐらいにはその家は大きかった。何人住んでいるのかと聞きたくなるが、エイミーは確か、上にお兄さんが一人いるだけのはず。日本では滅多にお目にかかれない豪邸を前に、私はちょっとビビってしまっていた。
名前を呼ばれ、女の子達の後をついて玄関ではなく、車庫から家の中に入って行く。其処はモデルルームかと言わんばかりの広々としたキッチン、そしてリビングルームがある。映画で見る様な大きな螺旋階段が2階へと続いている。
皆と一緒に1泊の荷物を抱えて、2階へ上がって行く。エイミーの部屋も広々として、お姫様の様なベットが真ん中にどんと据えられている。皆持って来た荷物を彼女の部屋へ置くと、またリビングへと逆戻りだ。

誰かが映画を見ようと言い出して、皆がリビングの大きなテレビの周りに集まった。某有名なファンタジー物で、誰それがかっこいいだのといいながら立派な革張りのソファーに寝転んだり、座ったりして映画を見だした。はっきりいって映画の内容はほとんど分からないが、それでも始めての事だらけで美香流はすっかりと舞い上がっていた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6087h/

みぃちゃんとギャバ猫のアメリカ生活記

2010年10月12日03時14分発行